

卷 頭 言——考古資料としての木簡——

八世紀末から九世紀初めの極めて限定的な時期に生産された土器に、須恵器長頸壺Gがある。二十年近い調査・研究の結果、伊豆三島の花坂島橋窯や駿河藤枝の助宗窯で生産された製品であることが判明した。長岡京に大量に運び込まれた他、同時期に多賀城や伊治城など東北各地の城柵へ持ち込まれ、その後平安京や斎宮でも使用されたことが知られる。今では多くの研究者がわずか一センチ四方の破片でもそれが壺Gと識別できるくらい、その製作技法、使用粘土、焼成方法を明確に指摘できるようになった。文字のない資料を総合的に、精確に分析した成果で、遺構・遺物の時期を推定する指標ともなりえている。

ところで、発掘調査で板状の木製品が出土すると、担当者は木片の製作方法、材質、寸法を観察し、出土状態や共伴遺物からその機能を明らかにしようと試みる。しかし、文字が一文字でも認められると、その木製品は布団の敷かれたバットに仰々しく寝かされ、文献研究者に奉られ、調査担当者の手元から離れてしまう。さらに、文字の保護のために保存処理に回され、木製品として仔細に観察することが困難になることもある。調査担当者が木簡の判読能力を持たないのか、木簡判読者に木製品分析意識がないのか、しばしばすれ違いを生み出す。これでいいのだろうか。

『木簡研究』第十二号で、「かつおぶしとネコ」にたとえて学会の現状を憂えたのは田中琢氏であった。氏の「古代史研究だけの学会ではなく、木簡に付随するさまざまな属性を総合的に考究する学会でありつづけよう」という呼びかけにどれだけ応えられたのか。岸俊男氏が創刊号で提唱した「木簡の出土状況や伴出遺物についての精細・的確な観察・記録」「形状・材質など物に即した精密な考察」も、その後の巻頭言で度々引用されて、考古学的な観察、分析手法への注意が喚起され続けている。

『木簡研究』の誌面の大半を占めるのが全国各地の木簡情報「〇〇年出土の木簡」である。最新の木簡情報をできるだけ漏れなく紹介する、研究者にとって欠かせない資料である。しかし、残念なことに、遺跡や遺構の解説と木簡の文字内容に関する解説が必ずしも「総合的」なものとはなっていない傾向がある。同様のことは奈良文化財研究所から刊行される『藤原宮木簡』や『平城宮木簡』を初め、全国各地の調査機関から刊行される木簡の報告書においても認められる。どの木簡がどこからいかなる状態で出土し、そのものは木製品としてどんな特徴を有しているかという情報が不足しているのである。

奈良文化財研究所には史料研究室があり、木簡研究の最前線にあつて木簡学を牽引し、所轄の平城宮や藤原宮出土木簡の分析のみならず、全国の木簡出土情報の収集や訳読にあたつてきた。同室には第一線の古代史研究者が配属され、交替で発掘現場に出て木簡出土遺構や出土状況を自ら確認するなどして、岸氏の提唱した木簡学の指針を率先して実践し、全国の手本となっている。しかし、残念なことに、研究所全体に木簡を考古学的に分析する研究者はほとんどいないのが現状ではなからうか。この様な状況では、かつおぶしを提供する考古学が、ネコとされた古代史研究者に「それを喰うな、よく観察しろ」などとはとても言えないのである。一方、全国の発掘調査機関に文献研究者が配置されている例もまた極めて希である。車の両輪のほずの古代史と考古学の研究者が揃つて研究する体制が整えられていないのである。

確かに文字の威力は強力である。年紀や名称でもつて伴出遺物に絶対年代を与え、出土地の地名や廃棄者の名前を特定することを可能にする。これに対し、「木簡状木製品」が大量に出土しても、文字のない木片から得られる情報は限られている。それでも、文字が全てを語ってくれるわけではない。税物に付けられた荷札がどこで製作されたかは長く議論されてきた課題である。また、使用済みの木簡がどの様に再利用されるのかについても、新たな論点が提議されている。須恵器壺Gの様に、データを丹念に、精確に集めれば、文字がなくともその生産地や流通系路を復原することができるのである。今一度原点に立ち返り、考古資料として木簡と「木簡状木製品」を研究してみたいものである。